

プレスリリース

十和田市の地域コホート研究に関するご案内



Towada City Hospital

十和田市立中央病院

令和8年4月9日

十和田市発の地域コホート研究の成果

母親の気づきが父親の周産期うつ病の早期発見に有用

EPDS-P（エジンバラ産後うつ病質問票パートナー版）日本語版を用いた前向き地域コホート研究

発表のポイント

- ・ 母親による観察でも、父親の周産期うつ症状の「気づきの入口」になり得ることを確認しました。
- ・ EPDS-P は、父親の周産期うつ症状の早期発見、早期支援に役立つ可能性が示されました。
- ・ 産後の父親のうつ症状は、実は約 8 割が妊娠中から継続していたことが分かりました。

周産期うつ病は、女性の妊娠から産後 1 年間に生じる疾患であり、主に母子保健の領域で研究と対策が行われてきました。他方、同時期に男性も約 10%と高率にうつ状態を呈することが明らかとなっており、男性が周産期に支援の対象になるという視点は乏しく、男性周産期うつ病の評価方法は、十分に確立されていません。

十和田市立中央病院メンタルヘルス科は、全国的にも珍しい取り組みとして、男性の周産期うつ病外来を開設し、これらの課題に向き合ってきましたが、さらなる効果的な支援体制の構築が求められています。

このため、十和田市立中央病院メンタルヘルス科の徳満敬大科長と、十和田市こども家庭センターの気田多香子次長らの研究チームは、十和田市の「全妊婦家庭訪問」および「乳児家庭全戸訪問」の対象となる皆さんに、十和田市地域コホート研究への参加を募り、男性周産期うつ病の効率的なスクリーニング方法の開発および支援体制の構築を試みました。

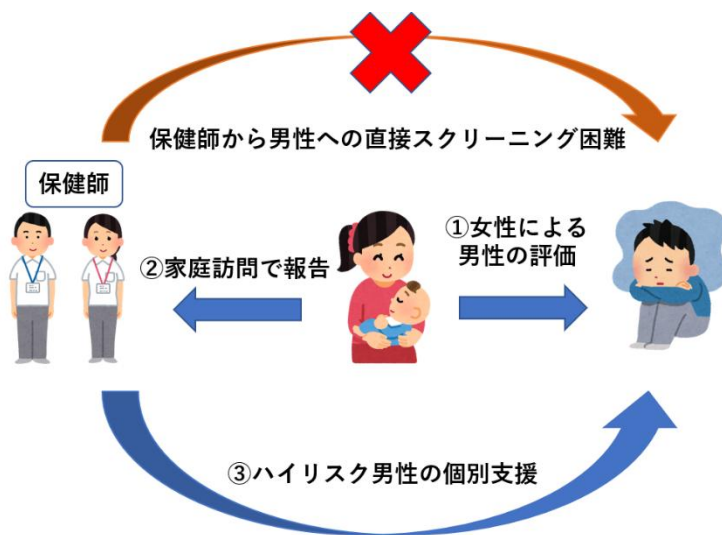
本研究のポイントは、母親が父親の様子を評価する EPDS-P が、父親の周産期うつ病の早期発見に役立つことを明らかにした点にあります。父親は健診や支援に参加しづらく、見落とされやすいことが課題です。本研究では、妊娠期 385 組、産後 411 組の参加者から得られたデータを分析し、EPDS-P が一定の精度で父親の抑うつ症状を捉え、母親自身の心理状態や年齢などに左右されにくいことを示しました。

主な結果

時期	解析対象	判定目安	感度	特異度
妊娠期	385 組	3 点	70.7%	75.9%
産後期	411 組	4 点	61.5%	86.8%

妊娠期の父親の抑うつ症状の割合は 10.6%、産後期は 6.3%でした。なお、EPDS-P は診断を確定する検査ではなく、受診や相談につなげるためのスクリーニングツールです。

EPDS-P の活用により、母親からの評価にもとづいて、周産期うつ病ハイリスク男性に対する効果的な支援が可能になることが期待されます（図）。



「出産前後に気分が落ち込むのは母親だけ」と思われがちですが、父親も同じ時期に不調になることがあります。眠れない、気持ちが沈む、イライラする、家庭や仕事に追い詰められていると感じるといった変化が続く場合は、一人で抱え込まず、家族、保健師・助産師、かかりつけ医、精神科・心療内科などに早めに相談することが大切です。妊娠中から父親のメンタルヘルスにも目を向けることが、家族全体を支える第一歩になります。

本研究結果は、査読つき国際誌 Scientific Reports に原著論文としてオンライン公開されました。研究にご参加いただいた十和田市民の皆様にも、感謝申し上げます。

論文情報



論文：Indirect screening for paternal perinatal depression independent of maternal factors using mother-reported EPDS-Partner in a community-based cohort in Japan. *Sci Rep* (2026).

<https://doi.org/10.1038/s41598-026-43513-9>

著者：Keita Tokumitsu, Norio Sugawara, Sheehan D Fisher, Takako Keta, et al.

本件に関するお問い合わせ先：

十和田市立中央病院メンタルヘルス科 科長 徳満敬大（とくみつけいた）

住所：青森県十和田市西十二番町 14 番 8 号

電話：0176-23-5121（代表）電話受付時間：平日午前9時～午後5時